

日本語の再発見

会意文字

理論的に言へば、「目に見ることの出来る“物”は“象形文字”で、「目に見ることの出来ない“事”は“指事文字”で表すなら、すべての言葉がこれで文字にすることが出来る理窟であるが、実際にはなかなかさうは行かない。

然し、象形文字や指事文字をうまく組合せると、それまでどうしても表すことの出来なかつた言葉でもうまく表すことが出来る、といふことがやがて発見されたのである。

例へば、“休む”といふ意味の言葉でも、これを一字で表さうとするとなかなかうまく行かないけれども、“人”と“木”と組合せて“休”といふ字を作ると、「人は“休む”時に木のそばを選ぶ」といふ連想から、“やすむ”といふ意味を表す文字を作ることが出来ることを発見したのである。

このやうな造字法を「意味と意味とを組合(会合)せた文字」といふ意味で“会意文字”と言ふ。会意文字に属する文字には、“林”や“森”や“从(従の本字)”や“众(衆の本字)”や“炎”のやうに同じ字を組合せたものもある。

“文字”の“字”も“会意文字”である。“宀”は、古い形は“介”で、家の形を象つてゐて“いへ”といふ意味を表した部首(漢字の部品のこと)で

ある。これに“子”といふ字を組合せて作った会意文が“字”である。この“字”は、「家に子供が生れる」といふ意味から「家族がふえる」といふ意味を表した文字であつた。

ところが、象形文字や指事文字を組合せると、新しい文字がどんどん作ることが出来、文字がふえて行つたので、それまで、象形文字や指事文字のことを“文”と呼んでゐたのに対して、会意によって作られたものを“字”と呼んだものである。

これは、また次のやうに考へることも出来る。二つの文字の合体によつて新しい字が作られることは、男女の合体によつて新しい生命が誕生するのによく似てゐる。それで、新しい生命が“子”であるのにちなんで“字”と名付けたものである、と。

だから、象形文字と指事文字とは“文”と呼ばれる“親文字”であり、会意文字は“字”と呼ばれる“子文字”である、と言ふことが出来る。